

二〇二二年度 安田女子高等学校 入学試験問題

国語

一

次の小説を読んで、後の問いに答えなさい。なお、以下の問題で、句読点は全て一字に数える。

案内され、店の奥に向かった。扉を開けると蒸気の匂いと甘い香りが迎えてくれた。

そこは広い 厨房^{ちゆうぼう}だった。中央に大きな作業テーブルがあり、^a壁際^{かきぎ}に大型の冷蔵庫、オーブン、そして見たこともない機械が並んでいる。

華房^{はなふさ}は湯気の立ち上がる蒸し器の前に立っていた。今日も作務^{さむえ}衣姿だ。積み上げた蒸籠^{せいろう}を持ち上げ、テーブルに置いている。

「少し待っていてください」

涼太のほうを見ずにそう言うと、蒸籠^{せいろう}に^b被^おせていた布巾を外し、中に並んでいた白いものを箸を使って取り出した。

「これ、何ですか」

涼太が尋ねると、華房はそれを盆に並べながら、

「薯蕷^{じょうよまんじゆう}饅頭^{じゆう}です。大和芋^{やまといも}と上用^{じようよう}粉^{こな}といううるち米を粉にしたものを合わせて皮にして、餡^{あん}を包んで蒸したものです。和菓子の中ではポピュラーなものですよ」

整列した饅頭は真っ白でこんもりと山のような形をしていた。

「この形、双曲線ですか」

「双曲線なら学校で習っているから知ってますが、生憎^{あいにく}とそれを意識して作ったわけではありません。ただ整った形にしたいだけです」

慣れた手つきで饅頭を盆に並べ終わると、

「ティンちゃん、これを店へ」

「はい」

ティンと呼ばれた女性は盆を持って店へ戻っていく。

「あのひと、お弟子さんですか」

「ティンちゃんですか。弟子といえは弟子ですね。和菓子に興味があつて遼寧省^{りょうねいしやう}から来日したんです」

「中国のひとつですか。たしかにイントネーションが少し変わってると思ったけど」

「勉強熱心な子です。僕も教えられることが多い」

そう言うと、華房は手を洗いながら、

「河合君——あなたの伯母^{おば}さんからは『甥^{おい}が会いたいと言っている』としか聞いていませんが、今日はどういう用件でしょうか」

と尋ねてきた。涼太がそれに答えようとしたとき、女性が戻ってきた。

彼女はぺこりと頭を下げて、言った。

「あらためてはじめまして。林^{リン}琴^{テイ}です」

と自己紹介した。涼太もお辞儀を返す。

「河合涼太です。今日は華房さんに¹教えてもらいたいことがあつて来ました」

「何を教えてもらいたいですか」

ティンが質問する。

「和菓子の作りかたです」

「そうですか。河合君は和菓子屋さんになりたいのですね」

「いえ、違います」

涼太は答えてから、少し考えて、

「今の答えは正確じゃなかったです。僕は自分が和菓子屋だけになりたくないとは思ってません。他のいろいろな職業と同じく、

今はまだ自分が^cツきたいと思つている仕事かどうかかわからないです」

「河合君、大学では物理を学んでいるんですよね？」

「あなたは私に人生をかけて学んできたことを教えろと言った。その見返りは？ あなたは私に何を与えてくれるのですか」
「それは……」

「若いひとの誤解は、そこにあります。子供の頃から大学まで、ずっと学ぶこと、つまり与えられることばかりしてきた。それが当然だと思っている。でもじつは、あなたたちも与えているのですよ。学んだことで広がるであろう、あなたがたの将来をね。それが世界を動かし、次の世代へと繋いでいく。ギブ・アンド・テイクとはそういうものです」

「それは……考えてもみなかった。そうか……!!」

涼太は、大きく頷く。

「それってつまり、作用と反作用のことですよね！」

「それはどうか……少し違うような気もするけど……まあ、いいでしょう」

³ 華房は苦笑する。

「河合君、あなたはなかなかユニークな発想をするひとですね。面白い。だから先程の言葉をもう少し訂正しましょう。あなたには何も教えません。でも、見ているのはかまいません」

「見るのはいいんですか」

「ええ。邪魔にならない程度にならね。仕事中は質問も受け付けません。何か訊きたいことがあったら休憩時間に。それでいいですか」

「はい。問題ありません。ありがとうございます」

涼太は深々と頭を下げた。

「そうと決まれば。ティンちゃん、着替えを出してくれませんか」

「はい」

ティンはどこからか彼らが着ているのと同じ作業衣を持ってきた。

「これ、着ていいんですか」

「着てもらわないと困ります。汚れた服でうろついてほしくないのです。隣の小部屋で着替えてください」

(太田忠司『和菓子迷宮をぐるぐると』)

問一 二重傍線部 a 「壁際」 b 「被せ」 c 「つき」 d 「ブンケン」 e 「翻し」について、漢字は読みを答え、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 波線部 「いささか」の意味を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なんとなく イ とても ウ 全く エ 少し

問三 傍線部 1 「教えてもらいたいこと」とあるが、次の文は涼太が華房に「教えてもらいたいこと」を説明したものです。空欄に当てはまる言葉を、(Ⅰ)は五字以上十五字以内、(Ⅱ)は二十字以上三十字以内で答えなさい。

(Ⅰ) () ことではなく、(Ⅱ) () こと。

問四 傍線部 2 「失礼です」とあるが、このときのティンの心情として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 涼太が気づかないのでできない人物であると気づき、涼太を教え導こうと勇み立っている。

イ 師匠が人生をかけて学んできたことを一方的に教えろという涼太に苛立^{いらだ}っている。

ウ 自分もまだ教えてもらっていないことを教えてもらおうとする涼太に嫉妬^{しつと}している。

エ 自分は中国から一人で来ているので、すぐに他人に頼る涼太の甘えにあきれている。

問五 傍線部3「華房は苦笑する」とあるが、このときの華房の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 涼太のユニークな発想にとまどいながらも、受け入れる気持ち。
- イ 人の意見に簡単に左右される涼太の優柔不断さを残念がる気持ち。
- ウ 独特の面白い発想をするので、涼太をほほえましく感じる気持ち。
- エ 批判されても全く動じる様子のない涼太に驚きあきれる気持ち。

問六 この文章を読んだ、Aさん、Bさんが話しています。これを読んで後の問いに答えなさい。

- A テインちゃんも涼太も和菓子に興味があつて勉強熱心という点が共通しているね。
- B じゃあ、二人の違う点は何かな。
- A 華房さんに弟子として受け入れられたかどうかという点かな。
- B そうだね。華房さんとの関係が違うよね。
- A 華房さんとテインちゃんは、自分が（ a ）になるということを知っている。でも、涼太は違う。だって、華房さんが涼太に「（ b ）」と言っているもの。
- B 涼太は「知ることが目的」と言っており、「楽しみのため」にここに来たと認めている。自分も将来（ a ）になるんだということに気づいていないのね。
- A その点を、華房さんに「若いひとの誤解」と指摘されたのね。
- B でも、華房さんの指摘を受けて素直に受け入れた涼太はすごいわ。私だったら、素直に聞けないなあ。
- A 「若いひとの誤解」に気づく前と後では学んだ結果も変わってくるよね。
- B だから、華房さんは見学を許可したのね！

- 1 （ a ）にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア もてなす側 イ 与える側 ウ 批判する側 エ 気をつかう側
- 2 （ b ）にあてはまる言葉を、華房の発言の中から十八字で抜き出して答えなさい。
- 3 傍線部「学んだ結果も変わってくる」とあるが、どのように変わるのか。「気づく前は」だが、気づいた後は「なる。」という形で説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

重松清さんの『青い鳥』という短編集があります。最近映画になりました。主人公の先生は強度の[※]吃音^{きつおん}です。その先生が、子どもたちを「いじめ」から遠ざけるための、極めて大切なメッセージを語ります。「¹本気で話したことは本気で聞かなくちゃいけないんだ」という印象的なセリフです。

先生の本気が、生徒たちに「感染」していきます。人の「尊厳」を傷つけ、そのことで「自由」を奪ってしまうのが、なぜいけないことなのか。それは「理屈」ではありません。「社会の中で人が生きる」ということを支える前提です。なぜそんな前提があるのか、誰にも分かりません。

だから「ダメなものはダメ」なのです。「みんなが言うからダメ」とか「誰かをいじめれば君もいじめられなくなる」などと説教するのはクダラナイ。「ダメなものはダメ」を伝えられるのは「感染」だけです。「感染」を引き起こせるのは何であるのかを、『青い鳥』はよく描いています。

心底スゴイと思える人に出会い、思わず「この人のようになりたい」と感じる「感染」によって、初めて理屈ではなく気持ちで動くのです。「いじめたらいじめられる」なんていう理屈で説得できると思うのはバカげています。世の中、弱い者いじめだらけだし、それで得をしている大人がたくさんいるのですから。

²そうじゃない。「いじめはしちゃいけないに決まってるだろ」と言う人がどれだけ「感染」を引き起こせるかです。スゴイ奴^{やつ}に接触し、「スゴイ奴はいじめなんかしない」と「感染」できるような機会を、どれだけ体験できるか。それだけが本質で、理屈は全て後からついてくるものです。(A)

想像してほしい。利己的な奴が本当にスゴイ奴だなんてあり得るでしょうか。「感染」を引き起こせるでしょうか。あり得ない。周囲に「感染」を繰り返す本当にスゴイ奴は、なぜか必ず利己的です。人間は、理由は分からないけれど、³そういう人間にか「感染」を起こさないのです。(B)

人間は、なぜか、利他的な人間の「本気」に「感染」します。それにつけても、最近の子どもたちは、「本気」で話されたことを「本気」で聞く経験、あるいはそれをベースにして自ら「本気」で話した経験を、どれだけ持っているのでしょうか。(C)

「本気」で話されたことを「本気」で聞く経験は、少なくとも一部では確実に減っています。たとえば僕は世田谷区^{せたがや}の東部に住んでいます。周囲には財務省の官舎があったり一流企業の社宅があったりして、両親の学歴がかなり高い地域です。ここで子育てしていると、いろいろ驚くことがあります。(D)

最大の驚きが「ダメなものはダメ」がないことです。子どもが弱い者いじめをしていますが「頭ごなしはいけません、まず子どもの言い分を聞きましょう」などと言うのです。僕があわてて調べてみると、そのような指南をする子育て雑誌や子育て本が、⁴巷^{ちまた}に溢^{あふ}れているではありませんか。

バカげています。口から先に生まれてきた僕の経験を振り返っても、また、やはり口から先に生まれてきた僕の娘(二歳半)を見てみても、「子どもの言い分を聞きましょう」なんて言ったら、それこそ飛んで火に入る夏の虫。デマカセとまではいなくても、子どもは何でも言えてしまいます。(E)

もう一つ、「本気」で話されたことを「本気」で聞く経験は、社会の変化への適応に関する種の合理性ゆえに、これからも確実に減っています。「若者のコミュニケーションはフラット化したか」で述べた通り、特定の相手にコミットしてバカをみるよりも、相手を取り替えた方が低コストだからです。

つまり、昔は「本気」で聞かなければ生きていけなかったのが、「本気」で聞かなくてよくなりました。「本気」で聞かなくてよくなったということは、「本気」で聞いてくれる人がいなくなるということですから、「本気」で喋^{しゃべ}るのもバカバカしくなります。あとは単なる悪循環です。

そんな悪循環の中で、「場」への適応だけが肥大します。この「場」では、昔と違って、誰も「本気」で話したり「本気」で聞いたりすることがない。そんな「場」で「仲間と同じでなくちゃいけない」という⁴同調圧力^{どうどうあつり}に対処しなければならぬ。昔の共同体にはなかった課題です。

それでも、他に「場」がなければ、この課題は優先されざるを得ません。そうした課題が優先されれば、他者の「尊厳」を回復不能に損壊することも「あり」になってしまいます。ここに度を越した「いじめ」が蔓延^{まんえん}してしまう社会環境があります。社会環境への適応が「いじめ」をもたらす以上、⁵環境をいじるしかありません。

※吃音・・・話し言葉が滑らかに出不来発話障害のひとつ。

問一 傍線部1「本気で話したこと」にあたるものを次の中から全て選び、記号で答えなさい。

- ア 「ダメなものダメ」
- イ 「みんなが言うからダメ」
- ウ 「誰かをいじめれば君もいじめられはいい」
- エ 「この人になりたい」
- オ 「いじめはしちやいけないに決まってるだろ」
- カ 「子どもの言い分を聞きましよう」

問二 傍線部2「そうじゃない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人にいじめをやめさせるのは、人をいじめる人ではなく、人をいじめない人に対して持つ憧れであるということ。
- イ 人にいじめをやめさせるのは、単なる理屈ではなく、いじめてはいけない理由を理解することであるということ。
- ウ 人にいじめをやめさせるのは、損得勘定ではなく、本気で語られたことに心から共感する経験であるということ。
- エ 人にいじめをやめさせるのは、感覚ではなく、いじめがもたらす結果やリスクを理解することであるということ。

問三 傍線部3「そういう人間」とはどういう人間か。十五字以上二十字以内で説明しなさい。

問四 本文中の空欄（A）～（E）のうち、次の一文が入るのにふさわしい箇所を一つ選び、記号で答えなさい。

それこそが「感染」の土台であるのに。

問五 傍線部4「同調圧力に対処しなければならぬ」とあるが、そのような状況になったのはなぜか。七十字以上八十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部5「環境をいじる」について、本文の趣旨をふまえるとどのようなことができるかを考え、四十字以上五十字以内で

次の文章は「竹取物語」の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

いまはむかし、たけとりの翁おきなといふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

翁は、その子連れて帰る。三月ほどで輝くばかりに美しく成長した女の子は、「なよ竹のかぐや姫」と名づけられた。美しいかぐや姫の噂うわさを聞き、求婚する人が多く集まってきたが、相手にされなかったため、しだいに来なくなっていく。その中でも、特に熱心な五人の貴公子が、依然として結婚を申し入れ、かぐや姫に対する切実な思いを見せるように、屋敷の周りを何ヶ月も歩き回っている。

翁、かぐや姫にいふやう、「我が子の仏。変化へんげの人と申しながら、こころ大きさまでやしなひたてまつる心ざり。私の大切なよ 大変な 養い申し上げている私の気持ち

しおろかならず。翁の申さむこと、聞きたまひてむや」といへば、かぐや姫、「何事なにごとをか、のたまはむこととは、並ひとおりてはありません おっしゃることは

うけたまはらむらむ。変化の者にてはべりけむ身とも知らず、親とこそ思ひたてまつれ」といふ。翁、「嬉しうれてございます我が身のほどをも 親とはかり思い申し上げます

くものたまふものかな」といふ。

「翁、年七十に余りぬ。今日けふとも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふこと結婚する

とをす。その後のちなむ門かど広くもなりはべる。いかでかさることなくてはおはせむ」。かぐや姫のいはく、「なんぞや、一門が繁栄するのです どうしてそうすることなくいらっしゃってよいでしょうか どうして

さることかしはべらむ」といへば、「変化の人といふとも、女の身持ちたまへり。翁の在あらむかぎりはかうても そんなことをいたしましょうか（いやです） こうしても

いますかりなむかし。この人々の年月としつきを経て、かうのみいましつこのたまふことを、思ひさだめて、一人一人にいらっしゃれるでしょうよ この五人の人々が長い間 このようにおいてはおっしゃることを よく判断して（その中のお一人に

あひたてまつりたまひね」といへば、かぐや姫のいはく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らず、あだ心あだこころ 結婚してさしあげなさい 私の容貌が美しくもないのに 浮気心

つきなば、後くやしきこともあるべきを、と思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き心あざしを知らず、このうえなくすばらしいお方でも 愛情

は、あひがたしとなむ思ふ」といふ。

翁のいはく、「思ひのこくものたまふかな。そもそも、いかやうなる心ざしあらむ人にかあはむと思す。おほ 私の考えと同じことをおっしゃるねえ どのような お思いか

かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ」。かぐや姫のいはく、「なにばかりの深きをか見むといはむ。これほどの愛情が並一通りでない人々のようだ

どれほどの深い愛情を見たいと言うでしょうか

いささかのことなり。人の心ざしひとしかんなり。⁵いかでか、中におとりまさは知らむ。五人の中に、
愛情 同程度のようです

ゆかしき物を見せたまへらむに、御心ざしまさりたりとて、仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申したま
見たいと思う物を見せてくださる方に
として お任せしましょうと いらっしゃる人々に申し上げてください

「とごふ。」「よきことなり」と受けつ。

問一 波線部「いふやう」の読み方を答えなさい。

問二 二重傍線部「翁の申さむこと、聞きたまひてむや」とは、「私の申し上げることをどうか聞いてください」というような意味です。それを踏まえて、次の1～3の問いに答えなさい。

1 傍線部1「うけたまはらざらむ」とあるが、翁の言葉に対してかぐや姫は何と答えたのか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 翁が「嬉しい」と言ったことから、かぐや姫は「言いなりにはならないが、翁には感謝している」と答えたと思われる。

イ 翁が「年七十に余りぬ」と話し始めたことから、かぐや姫は「言うことを聞くつもりはない」と答えたと思われる。

ウ 翁が「年七十に余りぬ」と話し始めたことから、かぐや姫は「理由を聞かせてほしい」と答えたと思われる。

エ 翁が「嬉しい」と言ったことから、かぐや姫は「どんなことでも翁の言うとおりにする」と答えたと思われる。

2 傍線部2「今日とも明日とも知らず」とは、どういうことか。現代の言葉を用いて、十五字以内で書きなさい。

3 翁はかぐや姫にどうしてほしいと言ったのか、二十五字以内で書き、さらにその理由を二つ書きなさい。ともに現代の言葉を用いて書くこと。

問三 傍線部3「さること」とはどういうことか。本文中から五字以内で抜き出さなさい。

問四 傍線部4「深き心ざしを知らでは、あひがたしとなむ思ふ」とあるが、かぐや姫は何とと思っているのか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 五人の貴公子の愛情の深さを確かめないでは、結婚することはむずかしいと思っている。

イ 五人の貴公子の志の深さを知ることによって、相手に対する愛が確かなものになると思っている。

ウ 五人の貴公子がかぐや姫の深い思いを知らないままでは、親しくすることはできないと思っている。

エ 五人の貴公子のそれぞれの愛情の深さを知ってしまったら、誰とも結婚できなくなると思っている。

問五 傍線部5「いかでか、中におとりまさは知らむ」とあるが、かぐや姫の思いとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人々の愛情は誰に対しても平等に注がれるべきもので、絶対に、人の優劣に応じて差が出たりすることは許されない。

イ 五人の愛情の深さはほぼ等しいようだが、なんとしても、五人の愛情の優劣を知り真実の愛を見つけない。

ウ 人々の愛情の深さは誰も皆同じようなものなのに、なぜ、少しの違いを見つけて優劣を決めなければならないのか。

エ 五人の愛情の深さは同じくらいらしいので、今のままでは、五人の中での優劣をつけることはできそうにない。

